令和２年度　第２回小平市総合教育会議　議事録

１　日時　　令和２年１２月３日（木）１０時００分～１１時２５分

２　場所　　小平市役所　５０５会議室

３　出席者

（構成員）小平市長　　小林　正則

教育委員会

教育長　　古川　正之

教育長職務代理者　三町　章

委員　　山口　有紀子

委員　　丸山　憲子

委員　　青木　雅代

（構成員以外の出席者）

津嶋企画政策部長、川上教育部長、国冨教育指導担当部長、安部地域学習担当部長、相澤政策課長、市川教育総務課長、季高地域学習支援課長、坂本公民館長、利光図書館長、事務局職員２名

（傍聴者）１名

４　会議内容

１０時００分　開会

（開会宣言）

〇小林市長

定刻になりましたので、ただいまより令和２年度第２回小平市総合教育会議を開催いたします。進行につきましては、会議の主催者である私が務めさせていただきます。

教育長及び教育委員の皆様には、小平市の教育行政の推進にあたりまして、ご尽力をいただき、改めて感謝を申し上げます。

また、森井前教育長職務代理者の任期満了に伴い、１０月１日付で新たに青木委員を教育委員に任命いたしました。今回は、青木委員が教育委員となられてから、初めての総合教育会議でございますので、ご挨拶をいただきたいと思います。

それでは、青木委員よろしくお願いいたします。

〇青木委員

改めまして、おはようございます。１０月より教育委員として活動しております青木で

す。コロナ禍において、今まで当たり前に行ってきたことが思うようにできない状況が続いておりますが、教育委員として自分にできることを探しながら、日々の公務に向き合わせていただいております。

誠に微力ではありますが、これまでの経験などを生かし、教育委員の皆様、事務局の皆様と協力しながら、小平市の教育の発展のために努めてまいりたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

○小林市長

ありがとうございました。

さて、今年度の第１回目の総合教育会議では、「鈴木遺跡国指定史跡化とその活用について」と、「ＧＩＧＡスクール構想に基づく今後の教育について」、協議・意見交換を行いました。教育委員の皆様の、様々な観点からの多様なご意見をお聴きすることができ、意義深い会議であったと思っております。

（協議事項）

○小林市長

それでは、本日の協議に入ります。

テーマは、今、青木委員も挨拶の中で触れておられましたが、コロナ禍における「新しい日常」、あるいは「新しい生活様式」など、いろいろな表現がありますけれども、本日の協議テーマは、「新しい日常における地域の学びについて」でございます。

新型コロナウイルス感染症は、現在も収束の兆しが見えず、第３波とも言われる状況にございます。

今回の新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、市立小・中学校は過去に例を見ない長期の休業をし、公民館・図書館などの公共施設も臨時休館いたしました。その後、感染が収まらない中で、６月から学校が本格的に再開し、公民館・図書館も６月から利用を再開しましたが、現在も一部利用の制限をしながら開館している状況にあります。また、地域と学校が連携しての活動である、青少対の行事なども、中止を余儀なくされている状況にあります。

今後は、「新しい日常」のもと、学校における教育活動や、公民館・図書館などの社会教育事業を行っていく必要があります。前回は、「ＧＩＧＡスクール構想に基づく今後の教育について」として、コロナ禍を経ての、今後の学校教育についてをテーマといたしましたので、本日は、いわゆる、社会教育、生涯学習と言われる分野をメインとして、協議したいと考えております。

青少対や放課後子ども教室、学校支援ボランティアなど、これまで小平市で地域の皆様

により熱心に取り組まれてきたさまざまな活動の、「新しい日常」におけるあり方や、公民館・図書館については、「３密」として集うこと自体への制約が生じた中で、学校外での子どもたちの学びから高齢者まで、多世代にわたる地域の学びを支える役割をどう果たしていくか、また、どのような取組が期待されるかなど、コロナ禍を経た「新しい日常」のもとでの「地域の学び」について、今後の取組や方向性、考え方など、幅広く、長期的な視点も含めて、それぞれの関心の深い部分などについて、お話しをいただければと思っております。

それでは、事務局より資料の説明をお願いします。

○安部地域学習担当部長

はじめに、資料はございませんが、第１０期中央教育審議会生涯学習分科会の議論におきまして、本日の議題と関連する部分について、簡単にご紹介いたします。

本分科会におきましては、第９期答申「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」を踏まえつつ、社会の変化や課題を踏まえた新しい時代の生涯学習・社会教育に関する基本的方向性や推進方策について議論が行われ、本年９月に取りまとめられております。

その際、新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえた生涯学習・社会教育の在り方も含め、幅広い視点からの議論が行われております。

その中で、「生涯学習・社会教育は、個人の成長と地域社会の発展の双方に重要な意義と役割を持つものであり、その要となるのが、学びの場を通じた住民相互の「つながり」である。この「つながり」が、新しい時代の生涯学習・社会教育の鍵となると考えられる。」とし、教育委員会が様々な関係機関とつながりを持ちながら連携・協働し、一体となった取組を行う上で、「これまでの対面による「つながり」と、新しい技術を活用したオンラインによる「つながり」の、両者をうまく組み合わせることにより、さらに豊かな学びが実現することが期待される。」と述べられており、様々な「つながり」を通じて、生涯学習・社会教育の更なる広がりと充実を図っていくよう、積極的に対応していくことを強く求める内容になっております。

それでは、以上のことも踏まえ、新しい日常における地域の学びについて、資料に沿って説明いたします。

資料１をご覧ください。

まず、地域学習支援課が所管している地域の学びについてです。左上の囲みの、新型コロナウイルスに関する、これまでの主な影響でございますが、事業実施におきましては、令和元年度、本年２月に予定されていた「ヤング・ダンスフェスティバル」の中止以降、令和２年度に入ってからも、「広島平和学習事業」を始めとした事業が、ことごとく中止を

余儀なくされました。

地域の活動におきましても、「放課後子ども教室」をはじめとする事業や、青少年委員、青少対などの活動も中止または縮小をせざるを得ない状況が今日も続いております。特に青少対まつりなど、大勢の児童・生徒・地域の方々が参加し、十分な感染症対策を講じることが難しく、いわゆる３密を防ぐことが困難な行事などは、ほとんど中止になっているという状況でございます。

右側の囲みの、再開後の対策・工夫でございますが、学校施設を活用し学校と協力して実施している事業につきましては、「小平市立学校版感染症予防ガイドライン」に沿った事業展開を行っております。

また、成人式などの大規模なイベントにつきましては、２回に分けることによって、いわゆる３密を避けるなどの工夫を図ったうえで実施することとしております。また、成人式実行委員会や青少年委員会などの会議につきましては、３密を避けるため、可能な限りオンライン会議による活動を行っております。青少対などの地域の皆様に向け「ＷＥＢ会議アプリ入門講座」を開催し、オンライン活動のきっかけづくりも図っているところです。

次に、中段をご覧ください。

教育施策の方向性を定めた「教育振興基本計画」におきましては、「はぐくみ・支え合い学びでつながる　小平の　人・まち・未来」を基本理念とし、「連携の視点」、「個を生かす視点」を施策の展開の視点としつつ、めざす人間像を「社会的に自立し、地域・社会に貢献しながら、他者と共生する人」としています。

また、小平市で独自に使用している「地域学習」という言葉は、意図をもって教える「教育」とは異なり、自発的な学びである「学習」と「地域」を結び付けたものです。ここには、地域の方が学び、その成果を学校や地域に還元するという小平市の社会教育の考え方が表現されていると言えます。

このように、教育振興基本計画の基本理念や地域学習の考え方のもと、「学校」「家庭」「地域」をつなぐ取組を展開しています。その代表的な取組としてコミュニティスクールや、学校支援ボランティアを中心とする「地域学校協働活動」が挙げられます。

このコロナ禍、新しい日常において、教育振興基本計画の理念を実現し、自発的な学びや地域の連携を止めないためには、従来の対面型・集合型による取組とオンラインなどのＩＣＴの利活用による取組の両者を融合させる、いわゆるハイブリッド型の社会教育の推進が必要であると考えます。

下段の「現在の取組状況と今後の課題」をご覧ください。

これまで行われてきた「従来の対面型・集合型の活用」について、感染対策を講じたうえで実施を継続していくとともに、「オンラインなどのＩＣＴの活用」により、どのような状況下においても様々な学習活動等への参加を保障することが必要と考えます。従来の取

組の効果に加え、ＩＣＴを活用することにより、「時間・場所にとらわれず学習が可能」になるほか、高齢者の方や障がいのある方など、移動が困難な方々の参加の可能性も広がると考えられます。課題としては、「学びっぱなし、一方通行になる可能性」や「地域の学びとのつながりにくさ」が挙げられます。

以上のことを踏まえた今後の展望でございます。

オンラインで自分の好きなことを学ぶだけではなく、その学びを社会・地域に還元することによって地域の学び、すなわち地域学習につながり、地域の活動を「協働」により連携することにつながると考えられます。オンライン学習と対面型・集合型の学習を有機的に組み合わせ、学校と地域の協働の取組であるコミュニティスクールや地域学校協働活動と連携することや、オンラインによる個人学習を推進するとともに、その後の集合型の学習などを有機的に組み合わせ、自らが主体的に参加し、地域のみなさんと深く考えながら課題を解決するアクティブラーニングを実現するなど、教育基本法第３条の生涯学習の理念である「学習の成果を適切に生かす」ために、学習者が学校・地域と連携し活躍できる場を提供することが目標になります。

資料２をご覧ください。

次に、公民館・図書館が所管している地域の学びについてです。資料の左側が公民館、右側が図書館について記述をしております。

公民館・図書館につきましては、新型コロナウイルスの影響で、本年３月２日から概ね３か月間の休館を余儀なくされました。影響があった主な事業としては、公民館では、本年３月に予定されていたオール公民館まつりや講座などの事業の中止以降、本年度に入ってからも、公民館まつりや講座などの事業の中止が続いております。

一方、図書館では、講演会やお話し会等の中止をはじめ、健康センターで行う３～４か月児健康診査時に、赤ちゃんと保護者に対し、絵本の読み聞かせや図書館の案内を行った後に絵本を手渡すブックスタート事業も、対面での読み聞かせの実施ができていない状況です。また、図書館ボランティアの活動も休止しておりました。

その後、ようやく６月上旬に再開したものの、再開にあたっては、各業種別ガイドラインを参考に、感染症対策を図りながら、段階的に再開を図っているところです。

公民館では、各種講座や部屋の利用について、制限を設けながらの再開、一方、図書館では、館内の滞在時間を制限するなどして、いわゆる３密を回避する対応に苦心しているところです。

再開からこれまでの利用状況でございますが、公民館においては、利用者の回復の傾向があるものの、ご利用が多い高齢者の方が感染リスクを回避する行動がとられていると考えられ、当面は急激な回復はないのではないかと見込んでおります。

図書館では、貸出冊数及び貸出者数ともに、おおむね回復傾向にあります。若干ではあ

りますが、一人当たりの貸出冊数が増加しており、複数人での来館を避ける傾向もみられるところです。

各施設のあり方については、教育振興基本計画において、公民館は、「市民との協働の拠点、地域コミュニティづくりの拠点としての機能をあわせもつ施設」、一方の図書館は「地域の情報拠点として時代に即した図書館サービスを提供するとともに、本に囲まれた居心地の良い空間を提供する施設」としております。

これまでの経過や教育振興基本計画における施設のあり方等を踏まえ、両施設における現在の取組としては、いわゆる３密を回避するため、消毒や換気など必要な対策を講じるとともに、利用者の皆様方にも、施設利用にあたってマスクの着用などのご協力をいただいており、引き続き同様の対策を講じる必要があります。

今後の課題としては、公民館では、来館者を回復するための工夫に引き続き取り組むとともに、ＩＣＴの利活用により、来館できなくても講座などに参加できる仕組みづくりを行うこと、このことにより、新たな利用者の開拓の可能性が開けます。また、本来の公民館施設のあり方との親和性を確保していくことが挙げられます。

図書館では、いわゆる３密を回避するための貸出返却の自動化の取組や、Ｗｉ−Ｆｉなどの設備の設置、カフェの併設など、ウィズコロナ時代の滞在型の図書館を模索するとともに、来館しなくても場所や時間を選ばずに資料にアクセスすることができる電子図書館、電子書籍導入について研究を進める必要があると考えております。

最下段に、公民館・図書館共通の取組を記載しております。

なかまちテラスにおいては、このコロナ禍においても、ティーンズ委員会の活動に積極的に取り組んでおります。従来のように生徒が一堂に会することは避け、一部リモートでミーティングを開催し、生徒が選んだ本の投票を市内の各中学校や中央図書館でもできるようにして活動を継続いたしました。また、公共施設マネジメントの取組においては、小川駅西口公共床における施設の複合化の検討を具体的に進めているところです。

最後に、新型コロナウイルスが収束を見せない現状において、これからの地域の学びのあり方を展望することは非常に難しいことではありますが、このコロナ禍で、あらためて人と人のつながりの大切さが叫ばれ、地域の連携や協働の取組における地域の学びが担うべき役割の大切さが浮き彫りになっていると考えられます。

今後も、「学校」「家庭」「地域」のつながりが広まっていくよう、地域の皆様方とともに取り組んでまいりたいと思います。

説明は以上でございます。

○小林市長

それでは、皆様よりご意見を伺いたいと思います。まず、三町教育長職務代理者より、

お願いいたします。

〇三町教育長職務代理者

今の事務局の説明を聞き、また、資料を読ませてもらい、本当にこれからの生涯学習の方向性も踏まえて、しっかり精選され進めようとされているなと感じ、心から感謝申し上げます。

私なりに感じているところでは、公民館・図書館だけに絞って、自分の願いを話したいと思います。

まず、結論から言うと、公民館については、これからも市民の学習を支援する拠点だということで、人と人をつなげる役割をしっかりと担っていってほしいというのが私の願いです。それから図書館については、幅広い年齢層の市民、あるいは個人個人が、自分のニーズに応じてそこで豊かに過ごせる、そういう空間として再構築してほしいなと思います。

このことが公民館・図書館について私が思っていることです。

まず公民館については、これまでも取り組まれている、例えば事業企画委員会なども、全館で活動されており、特に地域ニーズに即した講座を検討したり開設したり、そういうことを通して人と人の関係をつくる役割を果たしている。特に地域の人同士のネットワークを作られてきているなと、私は受け止めています。

ただ、残念ながら、感染防止のための対策や参加が高齢者の方が中心ということでやむを得ないとは思いますが、それらによって今は人と人とがつながりにくい状況になっている。先ほどの資料の数字を見ても極端に利用者数が回復していないと感じました。

しかし、例えば、現在の講座室の使用状況は結構埋まっており、講座に対する定数、定員は減っているのかもしれませんが、ニーズについてはこれまでの統計を見て多いということは、潜在的なニーズはかなりあるだろうなと感じております。そのためにも、感染防止はしなければいけないけれども、安心して集まれる環境を整備してもらいたいと思います。

もちろんガイドラインや、医学的な根拠も押さえないといけないと思います。例えば単純に講座の定員数を減らす、あるいは部屋の利用人数を減らすということだけではなくて、仕切り板をもっと増やして完全に横と前を遮断することにより、もっと人数を増やせないのかなとか、そういった現状の施設で、何があれば以前の環境に近づけられるのかなどを第一に考えてほしいなと思います。そして少しずつでも改善してほしいということが公民館についての具体的な願いです。

財政的な負担も大きいとは思いますけれども、市民が利用できるWi-Fi環境の整備ということでは、公民館だけではなくて図書館にも言えることだと思います。

また、オンライン学習のためのインフラ整備も不可欠だと思っています。オンライン学

習の推進というのは、私が思うには個別化を図る学習環境をつくるということではないと思います。コミュニケーションツールとしての充実、そのためのオンライン学習の推進だと思っています。例えば、施設に入居している方が、講座に参加したいけどできない。そういう方が、実際に会場にいる人と一緒に、ハイブリッド型という形で参加できる。こういう交流や学習ができたら本当に素晴らしいなと思っています。

もう一点、人と人との関係をつくるということであれば、これはもっと先のことになると思いますけれども、学校を核とした地域学校協働活動が期待されているわけですけれども、そこでの地域の一つとして、公民館が持っている人のネットワークというところの役割も期待したいなと思います。

次に、図書館については、これまで本の貸出業務の工夫やレファレンス対応の充実など、市民の便宜を図る努力がされていて、開館再開後も貸出冊数も戻ってきており、図書館が一つの役割をはたしているということだと思います。ただ、自分が期待したい図書空間というのは、現実にいろいろな制限で、読書だとか勉強を行うスペースが極端に使えないということで、本当に残念だなと思っています。この間、中央図書館を見に行ったら、雑誌コーナーで実際に座って読んでいる人は６～７人しかいなかった。それからティーンズコーナーの机も制限されていて、いっぱいいっぱいで６人しか使っていない。それから２階の資料室は使用制限があり、あれだけ広い部屋でたった１人というような状況であった。本当に、本を借りる以外の利用者が減っていると感じるところでした。

以前、この総合教育会議で、中央図書館の開架の本をもっと減らしてフリースペースに、市民が寛げるような空間がつくれないかなという話をしました。全く真逆の環境が今あり、本当に残念です。

ただ、その日、中央公民館を覗いてみたら、喫茶コーナーがお休みだったのですが、そこにある机が全部埋まっていて、学生だけではなく、そこで本を読んでいたり勉強したりする姿がありました。図書館と公民館のそのコーナーのギャップがあまりにも大きくてちょっとショックを受けたという思いがあります。

市民が自分のペースに合わせて自由に過ごしたい、その空間として期待があるのだろうなと思いますが、公民館と同じように、感染防止のためには確かな情報をもとに対処していかなければいけないのですが、何かアイデアを出して、資料に示されているような、物理的な対応や環境整備を進めていただきたいなと思います。

そして、資料にある、よいなと思ったキーワードとしては、「本に囲まれた居心地の良い空間」、これを実現させてほしいなと思います。

最後に一点、小川駅西口再開発の複合施設については、ぜひなかまちテラスのノウハウを生かして、資料にあるような図書館と公民館の未来像を実現してもらいたい。居心地が良いそういう環境をつくっていただけたらなと思っています。

〇小林市長

どちらかというと、前のかたちに戻していくということでしょうか。

〇三町教育長職務代理者

オンライン学習のための必要な整備については絶対であり、大事なことだと思っています。それがベースになって、できるだけ人が集まる環境を作っていく、できないところをオンラインで補っていくということです。

〇小林市長

私は、この機会だからこそ思うこととして、図書館や公民館について、従来型の運営の仕方でよいのかどうか、私の中で疑問があります。だから「新しい日常」というのは、全く違う視点に立って、本当に公民館の役割は何なのかとか、ただ単に利便性を上げてオンラインでそれを補うとかではなくて、もっと根本的なところから見直すことが必要なのかなと思っています。

もちろん、従来から利用されている方の利便性を低下させてはいけないから、オンラインとかいろいろな対策を駆使しながら従来の機能を維持するというのはもちろん大事ではあるけれども、この機会を逆によい機会と捉えて、もう一度根本的に見直してみるということも必要なのかなと思っております。

この状況は数年続くだろうと思われます、だから元に戻ることはないというふうに思った方がよいような気がいたします。

〇三町教育長職務代理者

キーワードで言う「本に囲まれた」というのは、いっぱいあるというのではなくて、もっと本を減らして、見える本などは減らしてもいいです。例えば自分のやりたいことをやれるスペースがあって、そこに行って、雑誌を読む人もいればあるいはちょっと勉強する人もいる。又は、高齢の方が家にいてちょっと寂しいから外に行ってゆっくりできるような居心地が良い空間、そういうものがほしいなということです。

ただ、それが公民館・図書館として必要があるかどうかは、ある意味別議論だと思っています。それについては、市長のおっしゃるような、今までのままを機能させる必要はないと思っています。

〇小林市長

公民館に喫茶室があって、図書館で本を借りてそこで読む人もいれば、全く本を借りず

に喫茶室だけを目的にくる人もいる、そういう、思い切って図書館と公民館の垣根を取っ払ってしまうというのも、一緒の敷地にあればそういうこともあるのかなと思っています。

それでは、続きまして、山口委員、よろしくお願いします。

○山口委員

私は、今後の地域学習の考え方や展望について、今回二点をポイントに考えました。

一点目は「個々ではなく協働へ」、二点目は「置き換える、ではなく作り出す」です。

まず一点目、「個々ではなく協働へ」です。新しい学びについての議論は、個々の学習や事業の効率化を目指す視点では、もはや不十分だと考えています。個々とは、個人個人はもちろん、学校・公民館・図書館ですとか、教育部局・市長部局といった行政的な仕組みも個々です。個々それぞれが、目の前の課題解決に取り組むのはもちろん必要ですが、今後は個々ではなく、学び合うコミュニティをどう全体が協働して作り出していくかという視点が、より強く意識されるべきだと思います。

次に二点目、「置き換える、ではなく作り出す」です。

ＩＣＴの発展は、今までの学びの場がオンラインでできるようになったという段階ではもはやありません。多くの人たちが協働し、学びを深めていくために、ＩＣＴを活用した今までとは違う学びの形を新たに作り出すことが今後必要です。

以上の二点を踏まえて、「新しい日常」における地域の学びについて、具体的に考えました。

まず今後は、市民全体のＩＣＴ活用能力を底上げする必要があると思いました。特にご高齢の方の中には、現状、スマホやパソコンに不慣れな方も多く、今後新たに学ぶことに抵抗をお持ちの方もいらっしゃると思います。ただ、そういったご高齢の方を含め、今後市民全体がある程度のＩＣＴ活用能力を持っておく方が、防犯・防災・社会福祉など、緊急対応の観点からも、市民・行政双方にとって非常に有効ではないかと考えます。

今の若い世代は、ＩＣＴを日々活用しています。一定程度の研修を行えば、市民講師となりうる人材は市内にたくさん存在します。ご高齢の方を含め、様々な世代でＩＣＴを学び合う取組は、今後積極的に展開していけるとよいと思います。

次の段階では、人と人をつなぐプラットフォームを新たに作り出すことが必要です。今まで対面のみで構築されてきた人のつながりを、今後はＩＣＴを媒体に広げていく、ということです。

例えば、前回会議議題の鈴木遺跡に関しては、インターネット上に遺跡資料館や遺跡博物館を作れば、全国からそこにアクセスしていただけます。遺跡に関する講演会や勉強会を全国発信していくと、遺跡の知名度や関心も高まると思います。同じ分野に関心のある方々が、距離や時間の制限を超えてつながり合うプラットフォームを作ることは、今後行

政でも積極的に取り組んでいく分野になろうかと思います。

さらに次の段階では、市民自らが積極的にプラットフォームを利用する仕組みが必要です。個人が情報を発信したり、受け取ったりすることで、各々が生活の利便性を向上していけるようになります。

例えば、地域の防犯・防災マップやボランティア情報、職業情報などは、市民に随時書き込んでもらうシステムなどがよいかもしれません。さらに、その中から発信力や知識力を持った人材を発掘し、地域のリーダーとして育成につなげれば、個人の知識や体験がより広く循環することにつながります。さらに、今回のコロナ禍で影響を受けた、公民館まつりやダンスフェスティバル、音楽祭などは動画配信を取り入れていくとよいと思います。

もちろん、会場ですとか、観客の目の前でというのは大切な経験です。したがって先述のとおり、各イベントを単純に動画配信に置き換えるという発想では不十分だと思います。時間や距離の制限がない状態で、より多くの市民がイベントに参加できる仕組みを新たに作り出すこと、こういったことが今後必要だと考えています。

私自身もここ数年は、ＩＣＴを使った連続講座や学びのコミュニティに継続的に参加しています。特に今年は、多くのイベントや講演会に自宅からオンラインで参加しました。新しい学びの先行事例は、すでに数多く存在しています。行政の立場上、果たすべき責任、守るべき立場は少なからず存在すると思います。一方で、これまで重ねてきた歴史の中で、今後も大切に引き継いでいくものと、ここで一度無駄を削ぎ落として、新しく生み出すものとを精選することもまた、行政の責任と役割です。

今回のコロナ禍では、多くの方々が、様々な制約の中で日常を送っています。非常に苦しい時期です。しかし、これを契機に、小平市民がより豊かな学びを共有していける、新しいかたちが今後積極的に作り出されていくことを切に願っています。

○小林市長

京都大学教授の広井良典さんという方がいて、日本の社会というのは横並びを非常に好むということで、集団の中に個人が位置して情緒的な一体感を作っていくのが、日本の伝統的なコミュニティだと言っていました。コロナの影響で自粛を余儀なくされ、従来型の社会というのは一見よいようだけれども、相互監視型な村社会で、全員で守られているけれども全員で監視している。こういう社会から、このコロナ禍を契機にして、個人が独立しながら関係性や理念などを共有し、公共性を基盤とする都市型のコミュニティに変わっていくのではないかと、その代表的なものがオンラインであったり、テレワークであったり、個人をベースにしたものになると。

昔はどちらかというと村社会で、そういう集団に身を置くことによって安全も確保されると同時に監視もされている。それが全部分断されてしまっている。これから、個人とい

うものが非常にクローズアップされて、個人の意志がないと逆に生きていけなくなる。誰かが守ってくれて、だけれども自分も守って、今度はそういうものがなくなって、個人というものが非常にクローズアップされてくると。

ですから、これからの社会は、コミュニティのありかたそのものが変わってくる。そういう社会を作っていかなければいけないのかもしれないです。確かに従来型の「寄らば大樹の陰」とか「出る杭は打たれる」とか、要するに個性をどちらかというと抑制することで日本社会はある意味でつながっていたのが、そうではなくなってきたということだと思います。

新型コロナウイルスに感染した人が差別的な扱いを受けるというのは割と地方の方が多く、村社会というか、そういうものが根強く残っているところほど、異質なものを嫌う、差別するという風潮がある。東京では、小平市は感染者が二百三、四十人出ているが、差別的というか地域の中で孤立するということはそんなにない。ただ、地方ではそういうものがあるといいます。

今おっしゃったように、行政側でプラットフォームを作って、そこでみんながその仕組みを利用するというのは、高齢者などはなかなかついていけないので、それは地域のリーダーなどがいて全体的に底上げして、従来のスタイルではなくて、個人を中心にしたスタイルに切り替わっていくのではないかという気がいたします。

大きく社会が変わるときというのは、日本は大体外圧が多く、明治維新もそうです。戦後もそうです。何か大きな事件や事故、社会的な大きな変革のときに時代というのは大きく変わる。そういう意味ではコロナは収束していませんけれども、ここで大きく切り替えていくのかなと、オンラインというもので、時間とか場所の制約を受けずにコミュニティが醸成できるような、そういったものになるのかなと話を聞いて思いました。

それでは続きまして、丸山委員、お願いいたします。

○丸山委員

今回のコロナ禍で、緊急事態宣言であるとか不要不急の外出の自粛など、そういうところで文化や芸術活動というのが後回しになり、縮小や中止というのをせざるを得ない状況になっています。

忘れてはいけないことは、文化や芸術というのは、私たちの生活にはなくてはならない不可欠なもので、むしろそういうものが未来を切り開いていく力になるものだと思っています。逆にこういうときだからこそ、これまで脈々と受け継がれてきたような文化や芸術の灯を絶やさない、またはさらに灯をつけることが大切だと思っています。

もちろんこれは、伝統をずっと守らないといけないということではなく、意識的にそれを伝えていく、次の世代に残していくということが重要であり、特に文化財や、昔から受

け継がれている資料に関しては、それなりの意図を持って残していかないと、１０年２０年、もしくは１００年とか千年の単位で残っていかないと思います。

それらを残していくためには、それを残していく技術であるとか技術を伝える人というのが重要で、ここにはそういう意味ではお金がかかります。そういう文化や芸術に対しては経済的な支援が重要なのです。

小平市の社会教育施設で見ると、公民館・図書館だけではなくて、ルネこだいらのホールや鈴木遺跡資料館、平櫛田中彫刻美術館であるとか、そういうものも社会教育施設として挙げられますが、どれも人が集まる場として重要であり、大切な施設となっています。

例えば、鈴木遺跡資料館では、歴史、旧石器時代の遺跡博物館として私たちのまちの歴史を語る重要な場であり、平櫛田中彫刻美術館では、田中の作品を通して、芸術という感性を育てる場になります。もちろん公民館も市民との協働の場であったり、図書館も書籍を媒体とした情報発信の場であったり、ルネこだいらも芸術発信の場であったり、そこの場所に老若男女が集まって、様々な交流であるとかいろいろな学習活動を行うという、まさに生涯学習の場になるわけです。

「場」というのはやはり必要で、昔からもそうですが、これからも重要になります。幸いこのコロナ禍において、マスクを着ける、換気をする、密を避けることなど、正しい環境整備をすれば、ウイルスの感染症から身を守ることができるというのが実際証明されているわけなので、そこさえしっかりしていれば、元に戻るということはもちろん無理ですけれども、リスクを減らしてこれまでどおりや、むしろもっと新しい学習の場になることが可能になると思います。

オンラインやＩＣＴを活用するということももちろん重要です。例えば図書館でＩＣタグを利用した窓口誘導や、オンラインによる公民館での講演会の開催も大切であり、オンラインでやることが適当なもの、逆にオンラインではできないものもたくさんあるので、その使い分け、選択というのを、それぞれの施設で行っていくことが重要になってきます。

一番ここで言いたいことは、知識というのはオンラインで一方通行に伝えることはできても、芸術であるとか感性を育てる、感性を磨くというのは、オンラインではできないということです。ものを見ること、いわゆる五感で感じるもの、五感を使って得るものというのは、オンラインやデジタルではかなわないものなので、そういう意味で博物館や資料館や美術館、また、公民館、図書館、ルネこだいらというようなところで、本物のコミュニケーションをするということは大切になってくると思います。オンラインでできるものはオンラインで、逆に人にしかできないことは人がやるということを、これからさらによく考えていかないといけないと思います。

公民館や図書館、博物館もそうですけども、ソフトを作り出すというか、パッケージを作り出すというような、作ることというのは人でしかできないので、人がそういうソフト

を考えて発信していかないといけない。そういう意味では市民のニーズにいかに応えていくかというのは、人なわけなので、人材を育てることも今後重要な役割になっていくと思います。

幸い小平は、大学や独立行政法人の機関があるので、いろいろな諸機関とコミュニケーションをとって、人材を育てていくこと、また協働活動をしていくことなどが、これから新たなソフトを作りだし、小平市の場を盛り上げていくためには重要なことだと思います。

もちろんオンラインを否定するわけではなくて、ＩＣＴというのをぜひ可能な限り導入して、代替えできることはデジタルの方に移行するというのは大前提で、そういう意味では古い考え方かもしれないですが、コミュニケーションをとることや公民館でおしゃべりをすることなどは、生活を豊かにしていく、精神的な健康というものにもつながっていくのではないかと思います。いかにそういう場を、快適な場を作り出すかということが重要であり、それは図書館だからこう、公民館だからこうというのではなくて、例えばルネこだいらのホールでも、使っていないところを開放しておしゃべりをするスペースであるとか、勉強をするスペースにするなど、そういう枠組みを取っ払って、人々の、市民のニーズに応えていくことが重要であると思います。

○小林市長

日本人というのは振れ幅があり、例えばオンラインだと言うと、みんながＩＣＴ、オンラインだということになる。しかし、今おっしゃったように、文化や芸術というのは、そこの現場に立って、例えば旧石器の鈴木遺跡は土の現場に立つと全然違ってきます。平櫛田中もそうですが、小平市のホームページで見るより、現地で木彫を見ると、その質感や作者の思いみたいなものを感じることができる。広島の原爆資料館も、映像で見て知識を得たとしても、実際にそこで、亡くなった人の血が付いた衣服を見たり、弁当箱が潰れているのを実際にそこでそのものを見ると、やはり違うと思います。

オンラインやＩＣＴ社会の流れは止めようがないとは思いますが、それが今までの旧来型を全否定するみたいなところが日本人というのはあって、それが世代間の分断みたいになってしまうこともあります。昔は、お年寄りの話を聞いて学んだということがありますが、お年寄りというと社会的に役割が終わったというような、そんな変な社会、分断社会みたいなことになってしまうと、ちょっと危険なところもあります。

両方あってよいと思います。逆にどちらもなければいけないと思います。今回のコロナ禍を通して、人間というのは一人では生きられない社会的な動物であるということを我々は感じたのではないかと思います。家族のあり方などを考えたのではないかと思います。テレワークが良いと言いますが、例えばテレワークによって家族に問題が生じている人も現実的にいて、警察にも家庭の中のトラブルで電話が結構来るそうです。今までは、お互

い一定の距離感があったけど、夫がずっと家にいたり、子どもも学校が休みでずっと家にいたりすると、慣れないということもあり、そういったトラブルもあるので、新しいＩＣＴやネット社会そのものが全て良くて、旧来型が全部だめということではないと思います。特にその象徴的なのが、丸山委員がおっしゃったような文化や芸術だと思います。

今はそういう風潮に流れているので、旧来型のものとか、逆にネット社会についていけない者は用なしというような、そういう風潮があるのは危険だなと思います。山口委員がおっしゃったように、そうではなくてちゃんと底上げして、そういった人たちにも使えるような支援をしていくというような、セーフティーネットみたいなものを作っていかないと、切り捨てていくという社会になってしまうので、それを私は危惧しております。

それでは、青木委員、よろしくお願いします。

○青木委員

今までの委員の話を、どれもこれからの社会の中で本当にうまく取り入れていけたらよいなと思って聞いておりました。

やはりコロナ禍ということで、いろいろなことが変わってきてしまい、その中でできることということで、私も公民館や図書館というのは、週に１、２回訪れるほどよく利用させていただいていますので、本当に大切な施設だと思っております。利用が再開してからも、いろいろな工夫をして、いろいろなことをしていただいているので、不便なく私は使わせていただいておりますが、やはりいくら感染対策をしていますと言っても、それ以上に感染リスクの高い方とか利用を躊躇する方というのも多いと思います。そんな方も参加できるようなもの、利用できるようなかたちというものをまず考える必要があるかと思います。

そうすると今までも出てきたように、オンラインでの講座や、オンラインで何かできるものということで検討していく必要があると思いますが、やはり公民館の利用者の方というのは高齢の方などが多いので、急に講座を Zoom でやりますよと言われても、なかなか難しいと思います。青少対の方へ、オンラインの導入の講座をされていましたけど、そういう感じで日頃からそういうところの活用の仕方の講座なども開いて、今後こういう場合には使えるという状況を作っておくことは必要かなと感じました。

自分もオンラインでの講座など、市で行った講座があったのでそれも聴いてみたりしました。それで講座というのは知識を得るためのものとしては一方的でも本当に大丈夫だなと思いましたが、体験をして得ていくもの、特に子どもに対しては体験を通して得ていくというのは本当に大切なことなので、その辺りのバランスというのを今後考えていかなくてはいけないのかなと感じました。

子どもが二人とも市の青少年リーダー養成講座に参加させていただきました。学区を越

えた交友関係もでき、小平の魅力をそこで学んで、今後その良さを地域で伝えていける人に育てばいいかなということで参加させていたのですけど、今年度は残念ながら活動が中止でした。

大学が行っている小学生対象の創作活動をさせるサークルは、例年は大学とか公園で活動しているので、今年度はなくなるのかなと思いましたら、大学生はいろいろ工夫を凝らして子どもに創作活動をさせることを、Zoom で画面を通してやってくれました。

私たちだと画面を通して人と話すのは慣れないのですが、子どもと大学生はとても自然に会話しながら、こちらで創作し、向こうから声を掛けるということができていました。やはり時代なのかなと思いますが、小さいうちからそういうものに慣れていくことによって、会わなくても、マスクをしていないだけでも表情を見ることができるので、自然なやりとりができる環境というのは作っていってもよいのかなと思いました。

小平は多くの大学や研究機関などがあり、いろいろなアイデアや力を借りたり募集したりすることができる環境にあると思うので、大学生のすぐちょっとやってみようというふうにできる若い力や若いアイデアを、どんどん公民館などでも取り入れて活動を続けていくことによって、子どもの体験みたいなものも確保されていくのかなとは思いました。

ただ、もちろん対面とか、外で実際に体験するというのは本当に貴重なことなので、いろいろ外での活動であれば割と感染対策もでき、人数制限などをして行えば取り組めることもあると思うので、そういうものも含めて、子どもに対する体験の活動は検討して続けていっていただきたいと思いました。

具体的には、この間学校訪問で行った花小金井小学校の屋上にあったブルーベリーの栽培がとても気になって、本当はそのものを見てみたかったのですが、学校全体の給食に出せるくらいブルーベリーが収穫できるということで、小平の魅力を知りながら、ものを一緒に育てるという、長い期間をかけて育てていくような活動というのも、子どもの体験にはよいのかなと思いました。コロナ禍においても問題なく、そういうことは対応できるのかなと思いましたので、具体的にはそんなことも入れられたらよいのかなと思いました。

それから、図書館は、私もずっと１０年以上子どもの読み聞かせを小学校でさせていただいておりますが、小平には昔からサークルやボランティアなど、図書館や読み聞かせを支える組織というのが多くありますので、子どもたちも恵まれているのかなと思います。そういう団体の方の協力も得ながら、子どもへの読み聞かせというのは、やはり継続していただけたらなと思います。

コロナ禍においては、心のケアというのがすごく大事になると思います。読み聞かせの本を聞いているときの子どもの姿というのは、本当に集中して、その世界に入り込むような、大人ではなかなかできないような目で本を見ています。そういう体験というのは、本当にこういう状況においては必要かと思います。図書館の読み聞かせなども少し始まって

いるようですが、少し間隔を置いて座るとか読む人が距離を置いて話すとか、いろいろな方法があると思いますので、小さいうちからの読書の体験というのをぜひさせてあげてほしいなと思います。

それから、図書館の本になりますが、本が好きでも来られない方というのもいるかと思います。その中で電子書籍の導入というのはとても有効かと思いますので、財政の問題などがあると思いますが、それは導入していっていただけるとよいなと思いました。

小・中学校の図書館は大変充実しておりますので、図書館も目的を絞って、乳幼児に対する絵本のブースを広くするとか、小・中学校の図書館に置けないような全集を置くなど、何か目的を絞ったかたちで、図書館の本の購入とか今後の図書館のあり方というのを考えていただき、来館が困難な方には電子書籍を利用していただくということで、目的を絞って図書館の本の整備というのをしていただけたらよいのではないかと思いました。

読み聞かせの方に戻りますが、今まで読み聞かせの部屋というのは割と暗くて狭いところが多かったのですが、これを機に、明るくて広いところでも読み聞かせできるように公民館と併設しているようなところは公民館で行うなど、もっと広い部屋で行えるよう考えていけるとよいのではないかと思いました。

今後、図書館と公民館というのはあまり切り離して考えるべきものではなく、一緒に考えられたらよいなと感じました。開館時間の問題や、勉強スペース、居場所の問題などを考えると、これからいろいろ複合化される施設があると思いますが、より一体化されたものとして考えていけたらよいのではないかと思いました。

○小林市長

青木委員は、お子さんが青少年リーダー養成講座を受けているとのことで、その視点などからいろいろお話しいただきました。生まれたときからＩＣＴ、いわゆるデジタル社会の中で育った人たちというのは、抵抗感なくやれるのだろうと思います。ただ、行政というのは、今日生まれた人から百何歳までのそういった人たちも含めて対応していかないといけないので、図書館と公民館というと高齢者の人たちが中心で、若い人たちはそこに行く時間さえないので、どうしても偏りがちになりますけども、社会の流れとして若い人たちのアイデアを利用するというのはとても大事だと思っております。

読み聞かせについては、情緒、五感を養うというか、人間性を豊かにするというか、そういうところではとても大事なことだと思っております。電子書籍は、デジタル教科書の議論もあったり、著作権の問題などもいろいろあったりしますけれども、電子書籍になれば、利用者から見れば、わざわざそこに行かなくても場所とか時間とか関係なく画期的なものだろうと思っています。

どちらかというと、図書館と公民館はあまり若者の利用者がいないというのは、利用で

きないという時間などの制約的なものがあるかもしれないですから、引き続き若者の立場からの公民館・図書館というものを検討して、意見を述べていっていただけるとよいと思います。

それでは、続きまして教育長の方からお願いします。

○古川教育長

まず、小林市長には教育行政に関する深い理解とご支援をいただき感謝しております。ありがとうございます。

先ほど事務局から報告がありましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、教育委員会が主催する行事は、２月に予定されていた「ヤング・ダンスフェスティバル」から中止しています。また、公民館と図書館は市立小・中学校の休校に合わせて、３月から休館といたしました。緊急事態宣言の解除を受け、公民館と図書館は６月から再開しました。しかし３密を避けるために、公民館は部屋の人数を定数の半分にしたり、利用時間を短縮したりしました。図書館は閉館時間を繰り上げたり、滞在時間を制限したりしました。市民の皆様には、ご迷惑とご不便をおかけしています。

再開から約半年が経ち、公民館の利用は昨年度の８割程度、図書館の書籍の貸出冊数はほぼ昨年どおりとなっています。改めて、公民館と図書館が市民の皆様にとって重要な場所であると思いました。今後、新しい生活様式の徹底をお願いしながら活用していただけるように取り組んでまいります。

地域学習支援課が担当する事業については、なかなか例年のとおりには進めることができない状態です。現在、来年の１月に予定されている成人式については、 二部制にして人数を削減したり、時間の短縮を図ったりして実施したいと考えております。成人式の内容の検討は、オンラインで実行委員会の会議を行っています。また、青少年委員会もオンラインで会議を行っています。それぞれの委員会の皆様がご理解・ご協力をしていただいていることに感謝しております。

その他としては、１２月の社会教育委員の会議をオンラインで実施する予定です。先日、委員の皆様にご協力いただきリハーサルを行いました。今後は、各委員会の会議等は従来の対面型とオンラインを併用した会議を検討してまいります。

公民館においても、市民の皆様が安心して活動できるように、ＩＣＴを活用した講座や講演会等を工夫してまいります。図書館においては、この機会を捉え、図書館の新しいあり方を検討するとともに、電子書籍の導入を研究してまいりたいと思います。そして生涯にわたって学習できる機会にしていきたいと考えております。

さて、今週の日曜日、１１月２９日に小平第五小学校を会場に「コロナ禍防災シミュレーション」が開催されました。新型コロナウイルス感染症の収束の見通しが立たない中で

大きな地震が起きたという想定で訓練がありました。感染が心配されましたが、このような時期だからこそシミュレーションを実施しようという、地域の強い思いに感動いたしました。

先ほど市長も話されたように、小平市は学校を拠点として青少対や放課後子ども教室をはじめ、地域の皆様が熱心に活動していただいております。現在は感染症拡大防止のため、行事の中止等自粛していただいております。常に子どもたちや市民の皆様の健康・安全を第一と考え判断していただいていることに、深く感謝しております。

今後、文部科学省等から出される、新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアルや業種別ガイドラインに従い、感染症の拡大防止を徹底しながら、事業が実施できるように、地域との連携を進めてまいります。

○小林市長

教育委員会の取組の事例、あるいは取組の姿勢をお話しいただきました。

大体予定をしていた時間に達しましたので、終わりにしたいと思いますけれど、一巡をしたので、何かあれば一言、山口委員どうですか。

○山口委員

皆さんのお話を聞かせていただいて、議論しなければいけない点がたくさんあるなというふうに感じています。まず私たちがやらなければいけないのは、何をオンラインでやって何を対面で行うのかという線引きを、明確にしていくことだと思いました。

あとは、先ほど市長からもお話がありましたが、これからは集団の中で同調するような生き方ではなく、ひとりひとりが自律して意見を発信し受け取る。そういう能力が必要になってきます。学校教育の場、これからそういう時代に出ていく子どもたちに対しては、やはり自主的・自発的な学びとともに、自律を促すような教育活動が実施されていくとよいなというふうに、今日の話を聞いて感じました。

○小林市長

さっきの京都大学の広井良典さんの話もそうですけど、これからは個々人が独立しながら関係性を持っていくという時代に入ってきたということです。独立というのは、要するに自分の意志をしっかりと持って対応する、組織の流れの中で委ねるのではなく、ちゃんと自分というものをしっかり確立をして、その中でコミュニティを作っていくということなのだと思います。

三町委員、全体を通してどうですか。

○三町教育長職務代理者

やはり高齢者と言われる方々に対しての行政サービスをこれからどうするのかということが、大きな課題だと思っております。公民館で実際にスマホの講座をやられています。しかも iPhone 用とそれから Android 用をちゃんと分けて講座をしています。一応の手は打たれていますが、それだけではこれからの流れの中にはついていけなくなるだろうなと思います。高齢者ばかりを対象にしていると、常に時代は更新されていて、高齢者は常に情報弱者になっていく。もう少し前のところをターゲットに当てて、年齢を下げて、５０代くらいからしっかり取り組むとよいのではないかと話を聞いていて感じたところです。

○小林市長

本当に時代の変化のスピードがものすごく速いです。ついていくだけでも大変なのに、さらに今回のようなコロナ禍でさらにそのスピード感が速まる。別にデジタル化とかＩＣＴというのは急に出てきたことではなくて、何十年も前から言われていますが、なかなかそこに大きく踏み出せなかった。行政側の対応の遅れや、世界的に見ても日本は遅れていると言われている。

流れについていけない世代や、情報弱者みたいな人たちも現れているということですので、そこはしっかりと、若い人だけを対象にするわけではなく、また今言ったように、高齢者だけを対象にするのでもなく、格差を生んだり差別化になっていったりすることに関しては、行政は公平・公正・平等ですから絶対してはいけない。それはものすごく舵取りが難しいですが、今後の課題として、全庁挙げて取り組んでいるところです。

それでは、本日の議題は以上となります。

今年度の総合教育会議はこれで終了となります。来年度の総合教育会議も、本年度と同様の回数の開催を予定しております。

新型コロナウイルス感染症に対しては、今後も、長期的な対応が求められます。引き続き教育委員会と連携し、小平市の教育のさらなる充実に向け、ともに一層努力してまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、本日の会議はこれで閉会といたします。ありがとうございました。

１１時２５分　閉会